

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：32663

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820044

研究課題名(和文) 破局の経験から共生の倫理へ：レヴィナス思想の現代史的意義に関する研究

研究課題名(英文) From the experience of catastrophe to the ethics of co-existence : studies on the actuality of Levinas' philosophy

研究代表者

渡名喜 庸哲 (Tonaki, Yotetsu)

東洋大学・国際哲学研究センター・研究助手

研究者番号：40633540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一に、20世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスが、第二次大戦という「破局」の経験を経て、どのようにして「共生の倫理」と呼ぶべき思想を樹立するにいたったのかについて、最新の研究状況を踏まえて考察をした。同時に、その思想から「破局」の問題全般を考察する糸口を見いだすために、現代における「破局」をめぐる哲学的思想や具体的議論についても調査を行なった。いずれについても、研究成果を適宜国内外の学会発表や論文投稿または共著出版のかたちで公表した。

研究成果の概要(英文)：Firstly, this study has examined, in the light of the latest researches, how Emmanuel Levinas, philosopher in 20th century France, has established his thought which can be called "ethics of coexistence" through the experience of "catastrophe" of World War II. At the same time, in order to find a clue to consider the problems of "catastrophe" from a broader perspective, it has also investigated philosophical discussions over modern "catastrophe". For both, research results were published in the form of a co-authored publication, paper or conference presentation in Japan as well as in France.

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：レヴィナス 倫理 共生 破局

1. 研究開始当初の背景

レヴィナス研究は、国内外でこの10年のあいだに飛躍的に発展している。なかでも、個別テーマに関するモノグラフィ研究、特に倫理学や現象学といった分野からの研究はすでに多くの蓄積がある。ただし、近年の新たな研究動向として指摘しうるのは、これまでさほど引き合いに出されてこなかった思想家との比較研究によって新たな解釈枠組を提示しようとする研究や、思想史的な関心から同時代の思想潮流や歴史状況のなかにレヴィナスを位置づけその意義を検討するという研究の増加である。

本研究は、こうした研究動向を念頭におきつつ、一方でレヴィナス自身が体験した「破局の経験」、具体的には第二次大戦（特にホロコーストにおけるユダヤ人虐殺）の影響に着目し、そこから彼がどのようにして他者との「共生の倫理」と言うべき思想を構築していったのか、この問題を、同時代の思想的潮流および現代史的な文脈に照らし合わせて検討するというものである。

これまで、レヴィナス自身のテキストにおいて戦争経験が主題となることが稀であったことから、彼の思想に対するその影響を低く見積もる見解が呈示されてきた。しかし、近年の新資料の公刊は、それとは異なる解釈の妥当性を示している。2009年に公刊された『レヴィナス著作集』第一巻では、レヴィナスが第二次大戦中に拘留されていた捕虜収容所で書き留めていた手帳内容および戦後直後に書いたメモなどがはじめて公表された。ここからは、20世紀のヨーロッパのユダヤ人にとってはまさしく「破局」と呼ぶべき経験が、レヴィナスにとって、単に個人的な影響を与えるのみならず、その後の思想形成に密接に絡むものであったことが読み取れるのである。これまでの研究でも、こうした影響はわずかながら指摘されてきたが、本研究は、さらに上の新資料の分析から出発し、レヴィナスのその後の思想形成にこの経験がいかなる影響を与えたのかをいっそう具体的に明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は「破局の経験から共生の倫理へ：レヴィナス思想の現代史的意義に関する研究」と題し、20世紀フランスで活躍したユダヤ系の哲学者エマニュエル・レヴィナス（1906-1995）の思想を主たる研究対象とし、それが同時代の社会的・政治的な文脈のもとでどのように発展したのか、とりわけ彼自身の体験した「破局の経験」から、「共生の倫理」と呼ぶべき思想がどのように形成されていったのかを明らかにすることを目的としている。その際、同時代のヨーロッパの思想家との比較検討を行なうことによって、レヴィナスの立場の特殊性を示すとともに、現代史的な課題に貢献しうる20世紀ヨーロッパ精神史研究を提示することが一つの展望と

なる。

3. 研究の方法

本研究は、上述の研究目的を達成するため、エマニュエル・レヴィナスが1930年代から第二次大戦直後の時期にどのような思想を抱いていたのか、この経験がレヴィナスの戦後の倫理思想の形成にどのような影響を与えたのか、その企ての意義は同時代の思想潮流および歴史的背景に照らしてどのように理解されるかの三つの主題について、二年間で研究を遂行する。

主として、研究期間の前半期に、一次資料および関連資料の精読や、国内外（主にフランス）の文書館や図書館における資料調査・分析を行ない、後半期には国内外の学会での報告や学術論文の執筆を通じて研究の成果を公表する。

4. 研究成果

2012年度（2012年9月以降）の研究成果は主に以下である。

まず、エマニュエル・レヴィナス研究については、最新の研究文献等の調査・読解を進め、なかでもレヴィナスにおける「倫理」概念を、「政治」や「宗教」といった概念との差異から明確化する試みを続け、その成果を論文として公表した（社会思想史学会および日本フランス語フランス学学会の学会誌に投稿し、査読を経て掲載された）。また、レヴィナス研究会との共催で、日本でのレヴィナス研究の現況を検討すべく研究会を開催した。とりわけ2012年10月にはレヴィナスに関する研究書を上梓した村上靖彦氏（大阪大学）を招き、合評会を開催した。

「破局」の問題については、ジャン＝リュック・ナンシーの破局論を『フクシマの後で：破局・技術・民主主義』として翻訳出版した。同著をめぐっては、東京大学東洋文化研究所「グローバル化時代における現代思想」(CPAG)においてシンポジウムを共催し、研究成果を公表した。また、20世紀における「破局」についての哲学的考察を展開したドイツの哲学者ギュンター・アンダースについても調査を進め、研究ノートを執筆した。

並行して、震災をめぐる状況の視察および意見交換のためにしばしば福島県に調査出張を行なった。その成果の一部は、2013年2月のパリ第7大学でのセミナーで報告した。

2013年度の研究成果は主に以下である。

まず、エマニュエル・レヴィナス研究については、これまでの未公刊資料を集めたレヴィナス著作集第一巻の精読および翻訳（共訳）を進め、同年度末に邦訳を公刊できた。なかでも、レヴィナスが第二次大戦中の捕虜収容所で書き留めていた「捕囚手帳」の意義について研究を進めその成果を2013年6月に京都ユダヤ思想学会において発表した（その後論文として投稿し査読を経て受理され

た)。レヴィナスにおける「ユダヤ」の問題についてはさらに同年7月の日仏会館におけるセミナーでこれまでの研究成果を発表した。また、レヴィナスとハンナ・アレントの思想的関係を主題とした共著をフランスの哲学専門出版社であるヴラン社から公刊した。担当箇所では主として「世界」概念をめぐる両者の思想の関係を論じた。さらに、レヴィナスの主著である『全体性と無限』をめぐる共著を国内で公刊し、担当箇所では主に「ピオス」概念に着目した同著の読解を行なった。

「破局」概念については、前年に引き続き、国内外の研究図書の収集・精読を行なったほか、福島県をはじめとする被災地での現地調査を行なった。その成果は、2013年12月の一橋大学哲学・社会思想学会での発表および2014年1月のパリ第7大学での国際シンポジウムでの発表に生かされている。理論的考察としては、フランスにおけるギュンター・アンダース研究の第一人者であるクリストフ・ダヴィッド氏（レンヌ大学准教授）を東京外国語大学の西谷修教授と共同で招聘し、同大学および東京大学との共催の形態をとって国内において数回の講演会・シンポジウムを開催した。また、現在フランスにおいて精力的に「破局」論を展開する哲学者であるジャン＝ピエール・デュピュイ氏の理論的な主著とも言える『聖なるものの刻印』を共訳にて翻訳出版した。

以上のように、本研究はレヴィナス研究についても「破局」概念の理論的・実践的考察という点についても当初の予定を大幅に超える成果を得ることができた。今後、これらの成果を一貫したパースペクティブのもとに置き直しまとめたものを単行本のかたちで公刊する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

渡名喜庸哲「エマニュエル・レヴィナス『捕囚手帳』の射程——レヴィナスの企て」『京都ユダヤ思想』第5号、2014年(査読有、掲載確定)

渡名喜庸哲「破局の凡庸さ」『グローバル化時代における現代思想』第2号「ジャン＝リュック・ナンシー『フクシマの後で』から出発して」、東京大学東洋文化研究所、2014年(査読無)

TONAKI, Yotetsu, « Emmanuel Levinas et le problème de la laïcité », 『フランス語フランス文学研究』第102号、137-152頁、2013年(査読有)

渡名喜庸哲「フランスにおけるギュンタ

ー・アンダース」『国際哲学研究』第2号、167-170頁、2013年(査読無)

渡名喜庸哲「レヴィナスにおける倫理と政治：プラトンとの対話と「もう一つのアルケー」」『社会思想史研究』第36号、108-126頁、2012年(査読有)

〔学会発表〕(計6件)

TONAKI, Yotetsu, « Difficile écologie politique au Japon d'après-Fukushima », *Penser l'écologie politique : Sciences sociales et interdisciplinarité*, 2014年1月13日、パリ第7大学

渡名喜庸哲「ポスト3.11の人間の地位——ハイデガー、アンダース、デュピュイ、ナンシー」、一橋大学哲学・社会思想学会、2013年12月7日、一橋大学

渡名喜庸哲「エマニュエル・レヴィナスと「フランス・ユダヤ人」のゆらぎ——世界イスラエル同盟をめぐる——」日仏会館人文社会科学若手研究者セミナー、2013年7月13日、日仏会館

渡名喜庸哲「エマニュエル・レヴィナス「捕囚ノート」の射程」、京都ユダヤ思想学会、2013年6月23日、同志社大学

渡名喜庸哲「破局の凡庸性：ジャン＝リュック・ナンシー『フクシマの後で』の後で」、東京大学「グローバル化時代における現代思想——概念マップの再構築(CPAG)若手哲学研究者ワークショップ」、2013年2月23日、東京大学

TONAKI, Yotetsu, « Quelques réflexions sur la philosophie d'après Fukushima », Séminaire du CSPRP, 2013年2月14日、パリ第7大学

〔図書〕(計5件)

エマニュエル・レヴィナス著『レヴィナス著作集1：捕囚手帳ほか未刊著作』三浦直樹、渡名喜庸哲、藤岡俊博訳、法政大学出版局、2014年、572頁

合田正人編、渡名喜庸哲ほか著『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』(明治大学人文科学研究所叢書)、知泉書館、2014年、234頁(担当箇所、147-173頁)

ジャン＝ピエール・デュピュイ著『聖なるものの刻印：科学的合理性はなぜ盲目化』西谷修、森元庸介、渡名喜庸哲訳、以文社、2014年、352頁

Mylène BOTBOL-BAUM Anne-Marie

ROVIELLO (Ed.) *Arrachement et Evasion: Lévinas et Arendt face à l'histoire*, Paris, Vrin, 2013, 190p. (担当箇所 77-92 頁)

ジャン＝リュック・ナンシー著 『フクシマの後で：破局、技術、民主主義』 渡名喜庸哲訳、以文社、2012 年、208 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

渡名喜 庸哲 (TONAKI, Yotetsu)

東洋大学・国際哲学研究センター・研究助手

研究者番号：40633540